

憑きものの現象論——その構造分析——(下)

岡田靖雄

四、憑きものの構造分析

持ち筋とはどういうものだろうか。吳秀三文書から二つの記載をひいておこう。

(その四)⁽²⁶⁾ (筆者名なし、部分修正)

世ニ謂フ所ノ犬神ヲ郷里ニ外道^ゴ又ハ道病ト謂フ(道病ハ外道病ノ略唱ナラン)此外道ハ何レノ時ヨリカ村落之内ニ二戸又ハ五戸六戸ト彼レハ外道ヲ持タル家係ト謂伝エ其家ノ婦女ヲ迎フル時ハ世間モ外道係統トシ縁組ハ勿論交際ヲ自然ニ遠ケルニ至配偶後村内外村ニテ同病者其家ヨリ来ルト謂依テ自然ニ遠サケル風俗トス全ク此ノ外道係統家ノ人(婦女多シ)他人ニ怨ミアルカ衣類器物裝飾品飲食物他人ノ生活ニ悲ミアレハ(金銭財産ヲ悲ムハ少シ)直チニ頭痛或ハ腹筋攣急肩神経痛齒痛ヲ発シ次ニ種々ナル怨又ハ悲ミヲ謂近隣数人寄り合ヒ問尋スレハ初メハ更ニ何レヨリ来ヲ謂ワス半日或ハ一日ニシテ追々其来所之家来リタル由縁ヲ曰ニ至リ又何月何日ニ誰ノ家エ行誰ヲ困ラセタリ甲之家ニテ何ヲ食ス乙ノ家ニテ家族中是レ々之談シヲシタリト其謂コト他ニ洩ルナキ話又ハ食品謂所事実ニ違フナシ初メテ世人ヲ驚カスコトアリ隣人ノ人ノ説論スレハ怨ミナキ者ハ其持主ノ近辺ニ赤飯握ヲ持行位ヒノ約束ニテ病人突然戸外逃出倒テ後其

人敢テ平素ニ異ルナシ本人更ニ病中之事并ニ飲食シタルコトヲ不知更ニ身軀ニ衰弱ヲ不蒙其經過ハ一定セス短キハ一日永キキハ数日ニワタル通常五日以内トス

〔その六〕(尼子四郎)⁽²⁷⁾

〇〇〇村犬神ノ概況

〔前略〕此動物ハ犬神持一人毎ニ七十五匹ツ、附属シ家族増ス毎ニ此比例ヲ以テ増加ス又タ血族外ノモノトイヘトモ其家ニ同居セハ犬神持トナル故ニ縁組上此血族ヲ恐ル、コト敢テ「レブラ」ニ譲ラズ〔中略〕此動物ノ最モ嗜好スルモノ否ナ唯一ノ欲望ハ飲食物ニシテ人ニ附クハ飲食物ノ羨望ニアルモノトス又タ此動物ハ各年齢ノ人ニ附クトイヘトモ好ンテ小兒、虚弱者、病者無学者ヲ襲ヒ健康者勇者智者学者等ニ附ク能ハス又タ生計上ニ就テハ中以下ニ附クコト多シ

〔後略〕

持ち筋のつくものはこのように血縁だけでなく、親密な関係によつても持ち筋とすることがある。だが、有名なおさき持ちの家⁽²⁸⁾にうまれた人が、他家に養子にいつてさらにそこから分家して、おさき持ちでない⁽²⁹⁾とみとめられているような例もある。

このような持ち筋地帯における憑きものの前述のような特徴(なかでも生き霊に類する点)が、これまでどの程度に気づかれていたか、まず精神科関係の文献からみよう。

憑きもの研究の先達の一人である森田正馬の「土佐ニ於ケル犬神ニ就テ」(一九〇四年)⁽²⁹⁾には、こういった特徴は指摘されて⁽³⁰⁾いない。おなじく森田の「迷信と精神病 附余の所謂祈禱性精神病に就テ」(一九一五年)⁽³⁰⁾には、憑きもの事例が一四例あげられていて(おそらく前論文につかわれたとおなじものが大部分であろう)、うち犬神つきは七例である。そしてうち五例が、犬神持ちの人らしくはなしたり、ふるまったりしており、また犬神の由来がわかるとされているものも五例である。だが、この論文が未完におわっているためもあつてか、森田はこういった特徴を指摘してはいない。山陰地方の

狐つきについては新福尚武・宮下直之の報告（一九五八年⁽³¹⁾）および新福の報告（一九五九年⁽³²⁾）がある。これらにとりあげられていた症例は鳥取大学医学部附属病院を受診した人で、米子市は人狐持ち地帯にあるにもかかわらず、症例に持ち筋についての言及はなく、また上記のような特徴も指摘されていない。須田圭三「憑き物俗信 飛驒の牛蒡種」（一九六九年⁽³³⁾）がとりあげている牛蒡種は生き霊家系とされる。加藤秀明・須田による症例報告（一九九三年⁽³⁴⁾）および加藤・白河裕志による症例報告（一九九六年⁽³⁵⁾）では、計五例があげられていて、そのうち四例で牛蒡種の由来がわかっているとされるが、どれも典型的生き霊つき症状は呈していない。牛蒡種では、その家筋とついたとされる状態とはあるが、その憑き方はさまざまなのである。エジナ（飯綱）憑きは岩手県北部にのこっているもので、エジナはある家にかわれているとされる（それは家筋とはなっていない）。稲田浩の報告（一九七二年⁽³⁶⁾）にはエジナ憑き三例があげられていて、うち二例ではエジナの由来がわかるとされている、生き霊つき症状を呈するものはない。

群馬県および埼玉県の一部分にはおさき（狐）もちとされる家筋がのこっていた。後藤忠夫「群馬の憑きもの オサキ伝承を中心にして」（一九八六年⁽³⁷⁾）には、おさき憑きの八例があげられている。うちおさきの由来がわかっているとされるのは二例で、生き霊つき症状のものはみられない。松岡浩司らの報告（一九九五年⁽³⁸⁾）は、徳島県山間部の犬神つきの一事例で、犬神は隣家からきているが、これも典型的生き霊つき症状はみせていない。

こうして、持ち筋地帯からの精神医学的研究では、森田の犬神つき例に典型的生き霊つき症状がみられるが、ほかにはつきりそうとみられる例はなく、また森田はこういった特徴を指摘していない。

つぎに、民俗学からの持ち筋地帯憑きもの研究をみたい。といっても、わたしが目をとおしたのは比較的入手しやすい文献だけである。

古喜眞興英「古琉球の憑物と巫祝」（一九二二年⁽³⁹⁾）が紹介するイチジャマ（生邪魔）は生き霊で、イチジャマ性は遺伝するとされていた。イチジャマの人はイチジャマ仏にのって、他人をやますということで、イチジャマ憑きの症状は普

通の病氣とすこしくちがった病み方である。「出雲山間部に於ける生靈憑きの話——私の家の告白——」(一九四九年⁴⁰)を報告している竹川文一は、自分の家がそういう憑きもの筋とみられているという。そのついた症状はさまざまな精神変調やおもい身体疾患である。また生き霊と、その家にまつている稲荷、狐とがからみあい、区別があいまいなようである。吉田禎吾『呪術』(一九七〇年⁴¹)は高知県幡多郡の農村で生き霊つき一七例をあつめたという。くわしく紹介されている人は婦人病がなかなかおらず、易者に生き霊つきといわれた。そこで祈禱師をよび、病人と代人(女)とを紐でつないで祈禱してもらうと、代人は病人のもと隣人の声で怨みをのべたとある。同様に代人が生き霊の本人にそっくりの声ではなしたもう一例もあげられている。つまり、生き霊が代人に典型的生き霊つき症状にちかきものをしめす例もあるが、こういう例はごく少数であろう。小松和彦が『憑霊信仰論』(一九八二年⁴²)で生き霊つきについて、生き霊それ自体の具体的イメージにはとぼしく、「ほとんどの人びとが強調するのは、人間の靈魂の遊離による他人への憑依よりは、むしろ人間の邪悪な感情、気持である」としていることが、生き霊つきについてのまとめにふさわしくおもわれる。

石塚尊俊は出雲を中心に憑きものを調査してきた人で、その『日本の憑きもの 俗信は今も生きています』(一九五九年⁴³)は、民俗学からする日本の憑きもの研究の集大成である。ここには、自験例一三と医師堀井度があつめた二〇例との計三三例(出雲市、簸川郡、西伯郡など)を堀井がまとめたものの要旨がのっている。このうち狐につかれた原因のわかる二一例中、狐持ちの怒り、ねたみをかつたものが計一九例、その他二例となっている。この二一例はその狐(人狐)がどの家からきたかわかったとされたのだろう。憑きものの症状として、典型的生き霊つき症状はあげられていない。

吉田は『魔性の文化誌』(一九七六年⁴⁴)で、群馬県山間部の老人からきいた話しをあげている。ある娘が狐につかれたので、その父は娘のうしろから狛銃をうったところ、弾丸は娘にはあたらなかったが、娘はたおれて正気にかえった。「娘に憑いた狐は狐持の狐で、よそから山仕事にきていた人が憑いたのだった」。この人が他の人についたとき、つかれた人は急にびっこをひきだし、狐がはらわれるとびっこもなおった。狐が娘についていたとき、父のうった弾丸は狐の足に

あたっていたのである。この話では人につく狐とそれをもっている人とが同一視されている点が興味ふかいと吉田はいう。尼子四郎(吳秀三文書その六、一八九七年)⁽⁴⁵⁾にもすでに、憑きもの落としのための「拷問若クハ祈禱ハ症ノ軽重ニ(ヨリ)非常ニ惨酷ヲ極ムルコトアルモ犬神附ノ身体ニ危害ヲ加フルコトナク却テ犬神持ノ身体ニ異常ヲ呈スルモノニシテ」とある。

広川勝美編『憑きもの タタリガミと呪い』(一九八二年)⁽⁴⁶⁾には、「キツネに憑かれた人は、モノ(ついたもの)——岡田の言葉をしゃべるのだとされる。しかも、モノの発する言葉は、モノを使つたとされる人の意志を代弁するものだとされている」とかいたあと、広島県比婆郡の人のことばをひいてある(ここに「使つた」とあることは一般的ではない、すでにのべたように、持ち筋の人が狐などを意識して「つかう」ことはすくない)。このあとにあげられている、おがみ屋による憑きもの落としでは、足のいたい病人の手が変な形になってから、他家のおばさんのことばで怨みをのべたあと、外道(イチチ)がたつた形であるいって、たおれた、とある。ここでは、そのおばさんの生き霊が外道の体にはいつて病人にのりうつった、といった構造が推定される。

注目すべきは、最近の香川雅信「登校拒否と憑きもの信仰——現代に生きる「犬神憑き」——」(一九九五年)⁽⁴⁷⁾である。徳島県で四国山地の盆地に位置するK町には犬神信仰が根づよくのこっている。ここで、犬神がついて子どもが登校拒否になるという現象がおこっている。登校拒否になった三事例があげられているが、その一例では行者さんにおがんでもらうと、行者さんが、子どもにとりついている人とおなじ声ではなしたとある。べつの一例では、やはり祈禱者の声がかわつてとりついた人の声でしゃべりだした。「憑いていたものは生霊あるいは大神といい、人の魂のようなものだといい」。香川は、K町における犬神は、動物霊でなく、人の生き霊のようなものとかんがえられていて、持ち筋の人が他人に恨み、妬みをいだくとその人の生き霊である犬神が相い手についてさまざまな病気をひきおこす、とのべている。さらに、これは現代において動物霊のイメージがリアリティをもてなくなつたためとらえてよいか疑問であるとして、

一八一三年（文化一〇年）ごろ幕府の奥儒者屋代弘賢によりおこなわれた一種の民俗調査『諸国風俗問状』にある阿波国の回答「阿波国風俗問状答」に「稀に犬神筋とや申者ありて、恨募れば生霊人を悩し申なり」とあることをひく。

ふりかえると、森田の犬神つき例に典型的生き霊つき症状とみるべき例があり、わたしがとりあげたもので典型的生き霊つき症状を呈したのは（もともと生き霊つきとされたものをのぞいては）、いずれも犬神つきとされた事例であった（高知県一例、広島県三例、徳島県二例）。これにたいし人狐例ではこういった例はない。とすると、犬神にはもともと生き霊にちかい性質があつたようである。こういう特徴がいままでどうして気づかれなかつたのだろうか。精神科医がみるのはだいたい散発例であり、他方民俗学あるいは文化人類学の研究者は散発例をみていないし、憑き方の構造はくわしく検討されてこなかつたのであるまいか。また、生き霊が犬神のような動物霊の衣をまとい、また「生き霊」とされるものが典型的生き霊つき症状を呈さないのはどうしてだろうか。六條御息所のような生き霊は、じつにおもく・おどろおどろしく、生き霊の本人にとつてもなんと情なくあさましいものであつた。さらに、トカラ悪石島のネーシ（巫女）について安田宗生（一九七二年）⁽⁴⁸⁾がのべているように、生き霊はもつともはらいにくいとされているようである。生き霊による典型的生き霊つき症状がすくないのは、生き霊のすさまじさを緩和しているのでなからうか。

精神科医では昼田源四郎が「狐憑きの心性史」（一九九七年）⁽⁴⁹⁾でこういった問題にふれている。中世において、物の怪の支配する物憑きの時代から狐憑きの時代への移行がおこつたことを指摘したのちに、昼田は、攻撃性が葛藤の相い手に直接むけられる関係から、攻撃性が狐や狐使いという第三者にむけられるようになったことの集団精神療法的機能を指摘している。

つかれた人と持ち筋とがちかしい関係にあることは、民俗学における憑きもの研究でも指摘されてきた。吉田（一九七二年）⁽⁵⁰⁾は、「憑く、憑かれるという現象は、現実の具体的な人間関係の軋轢、葛藤に根ざしていることが多い」、「憑いた方と憑かれた方との関係を調べてみると、同じ組内、近隣、耕地が隣接しているなどの特徴がある」とのべている。さ

らに、イギリスの妖術でも妖術のえじきとなる人と妖術者とされる人とのあいだにも同様の関係があることを指摘している。浜林正夫『魔女の社会史』(一九七八年)⁽⁵¹⁾はイギリスについて、「魔女と危害をうけたものとは、かならず顔見知りであり、同じ村ないし近くの村に住んでいるものである」、まずしい人につめたい仕打ちをしたときに報復として(まずしい人の呪いによって)災難がおこる、としるしている。キース・トマス『宗教と魔術の衰退』(一九九三年、原本一九七一年)⁽⁵²⁾がこの点をくわしく分析している。一六世紀の荘園制度崩壊によって貧民救済制度もくずれたが、貧乏人への慈善はキリスト教徒の務めであるとの認識はあった。そして、顔見知りの物乞いの女性たちを戸口からおいはらったのちに罪悪感がのこり、おいはらったのちに不運がおこるとそれはウィッチ(まずしい女たち)の報復とみられ、ウィッチクラフト告発が頻発した、というのである。持ち筋による憑きものも、ちいさなウィッチクラフトの告発も、顔見知り関係のせまい地域のなかでおこっていた。

つぎに身体疾患の問題がある。わたしが検討した散発例では、精神症状をかく例はなかった(それらは精神科受診例であるから当然であるが)。では、慢性身体疾患が憑きものと判断されたのは、持ち筋地帯だけかというに、そうではない。佐倉のあたりには狐つき俗信があったが、そこは多発地帯ではない。一八五〇年に佐藤泰然の子として生まれた林董は『後は昔の記』(一九一〇年)⁽⁵³⁾に、自家につかえた下婢がその家にかえてから、乳糜管閉塞で多食するほどやせていったところ、周囲の人はこの人を狐つきとして蕃椒燻しにかけて燻殺してしまった、としるしている。持ち筋地帯でなくても憑きものがつよく信じられていたところでは、慢性身体疾患が憑きものによるとされることはあったのだろう。

最後に検討するべきは、憑きもの症状の内容である。憑きもの症状は広義には他からそうとみとめられるもの(前記の慢性身体疾患もそうである)もふくむが、ここでのいうのは本人によってそのようにのべられる(あるいは表現される)精神症状としてのものである(本稿ではそれを憑き症状とよんできた)。ついているものが体にまぢかくみえる、感じられるという外部幻覚、体内にそれが感じられるという体感幻覚、ついている、ついで害をおよぼされるといった妄想、さらに

は自分がそのものになったとする人格変換(変身妄想)がある。この変身妄想でも、自分はたとえば狐であるとする言語面だけのものと、四つ足であるく、それらしい声をだすといった動作面におよぶものがある。しばしば、憑きものはなにかがのりうつたとしてそのようにふるまうことであると説明されるが、すでにみてきたように、動作面にまでおよぶ変身妄想は一〇〇年前にもかなりすくなかったのである。ただし、「うちの子は大食い」で狐でもついたのかしら」とは、いまでも老年の人によってときにかたられる。

ところで、ヨーロッパで日本の動物つきに相当するのは、*demonomania* (悪魔つき)と *lycanthropy* とである。*demonomania* のばあい、お祓いをうけて小悪魔や使いの小動物がはなれていくところが絵になっていることからみても、それが憑きものの一種であることはたしかである。*lycanthropy* は一般語では *werewolf* (あるいは *werwolf*) とよばれるもので、人が狼に変身して人や家畜をおそうとするものである。犬については *cananthropia* の語もあるが、これは *lycanthropy* の同義語ともされている。また獣一般については獣化妄想 *zoanthropy* の語もある。神(54)はこれらにならって狐憑病に *Alopekanthropie* の学名をあたえた。ところで、神の「狐憑病」の東京医学会講演時内容紹介(55)では、狐憑病の第三種はまったく自己をうしない狐になりきったと信ずるもので、その数はすくない、これは一種の変形的妄想に属するもので、欧州の狼憑病、犬憑病に類するので、神はそれに *Alopekanthropie* の名をあたえた、とある。つまり、東京医学会講演時には、狐憑病で獣化妄想の段階のものだけを *Alopekanthropie* とよんだ。狼人 *lycanthropy* との対比からすれば *Alopekanthropie* の語はこの狭義にもちいるのが妥当である。同様に「日本の犬神つき一般に *cananthropia* の語をあてることは、むしろ不適切というべきだろう。

日本の精神医学界では最近憑きものへの関心がたかまっている。そのいくつかをあげれば、高畑直彦・七田博文『いむ——アイヌの精神現象』(二九八八年、私家版)、高橋伸吾『きつねつきの科学』(一九九三年、ブルーバックス、講談社)、大宮司信『憑依の精神病理 現代における憑依の臨床』(一九九三年、星和書店)、高畑直彦・七田博文・内瀧一郎『憑依

と精神病 精神病理学的文化精神医学的検討』(一九九四年、北海道大学図書刊行会)、酒井明夫「西欧における Lycanthropy
と精神医学史的検討」(臨床精神病理、第一五巻第一号、一九九四年)、高橋紳吾『超能力と霊能者』(叢書、現代の宗教、一
九九七年、岩波書店)、大宮司信・千丈雅徳「憑依状態」(精神科治療学、第一二巻第三号、一九九七年)がある。これらによ
つて憑きものの精神医学的研究はさらにふかめられている。しかし、本稿でとりあげたような、持ち筋地帯における憑
きもの特徴はあきらかにされていない。精神科医がそういう例をみていないのだから、それも当然である。だが過去
に島村俊一、荒木蒼太郎、森田正馬はそういった機会をもつたのであり、かれらの遺産をほりおこすことは、憑きもの
の精神医学的研究と民俗学的・文化人類学的研究との架け橋となるだろう。

さて、結論としてこの論文の冒頭にのべたことにかえると、持ち筋地帯に特徴的な憑きものはのりうつりであり、散
発例のばあいはとりつきが特徴的である。こういった憑きものの構造を図式化してみよう。源氏物語の六條御息所のば
あい、そのいくつかの身体的属性(声、仕草など)もそなえたかのじよの執念(怨みなど)が、直接に墓上にのりうつつて
いる。人を円であらわし、その中心に人格があるものとすれば、黒小円であらわした執念が相い手の中心にうつるのが
のりうつりである。とりつきのばあいは、執念またはつく動物は相い手の周辺に(外部幻覚)または内部の辺縁部に(体
感幻覚)にあるといえよう。

そこで、古典的生き霊つき症状は図Ⅰのようにしめされよう。生き霊でもイチジャマのばあい、持ち筋の人は自分の
執念をとりだして、それを呪詛などの形で相い手におくりつけている。呪詛因子は相い手に病気をおこすので、呪詛因
子は相い手の内部でも辺縁部に位置するといえよう(図Ⅱ)。持ち筋地帯に特有であった、犬神がついたとされるが憑き
の現象は犬神でなく生き霊であるばあい(典型的生き霊つき症状としてきた)は、姿をあらわさぬ犬神は生き霊ののり
うつり手段であつて、図Ⅲのようにしめされよう(のりうつり自体は持ち筋の人の意志によるものでなく、犬神によるとされ

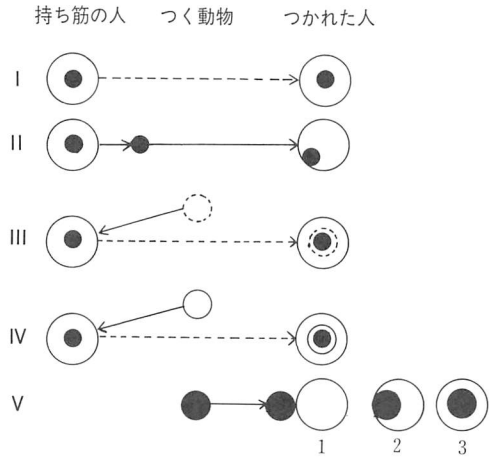


図 憑きものの構造 (説明は本文)
 → 意志による …… 無意識的

る)。おなじく持ち筋地帯にみられた、つかれた人には犬神、人狐としてあらわれるが、のべられるのは持ち筋の人の執念である。あるいは図Ⅳのように、相い手の中心に犬神か人狐が位いし、そのなかに持ち筋の人の執念(生き霊)といってよいほどの)がやどっていると図式化される。

ものを乙型とよぶことが便利かもしれない。また、憑きによって人格変換をきたしたが変身妄想にはいたらぬものは、人格変換といってもそれは言語面にとどまっている。変身妄想をきたした例、とくに獣への変身であるばあいは、人格の差を脳の構造にひきうつして、前者を大脳型に、後者を大脳—脳幹型になぞらえることが、理解をたすけるかもしれない。

なお、本稿で甲地事例にいられた狸つきは、持ち筋ではない多発地帯に属するので、狸つきは非持ち筋地帯にいられて、本稿の組み立てを持ち筋地帯対非持ち筋地帯としても、おおまかな結論はかわらない。

本稿は一九九五年一月二二日の日本医史学会月例会で、ついで一九九六年六月二二日に第九七回日本医史学会学術大会で「憑きもの再論」の題で発表した内容をさらにすすめたものである。

長年にわたり精神科医療史研究をとにもすすめてきて一九九五年六月二〇日に七三歳で死去した同志吉岡眞二の追悼に本稿をささげたい。

参考文献

- (1) 後藤省吾「憑依妄想ニ就キテ」『神経学雑誌』六卷(二〇号)、五六六～五七〇頁、一九〇八。
- (2) 岡田靖雄「狐憑き研究史——明治時代を中心に——」『日本医史学雑誌』二九卷(四号)、三六八～三九一頁、一九八三。
- (3) 岡田靖雄編「憑きものと精神病者」南博・岡田靖雄・酒井シヅ編『近代庶民生活誌』第二〇卷(病氣衛生)、九～二四〇頁、三一書房、東京、一九九五。
- (4) 江澤圭磨「犬神附或ハ狸神附ノ説」『東京医事新誌』五四号、一六～二二頁、一八七九。
- (5) 島村俊一「島根県下狐憑病取調報告」『東京医学会雑誌』六卷(二六号)、六九九～七〇五頁、(二七号)、七六九～七七八頁、(二二号)、九八一～九八八頁、(二三号)、一〇四九～一〇五四頁、(二四号)、一一四一～一一四六頁、一八九二、七卷(三号)、一二五～一二八頁、(五号)、二三三～二三六頁、(九号)四六八～四七一頁、一八九三(前掲(3)、四四～七二頁に再録)。
- (6) 前掲(3)、一〇～四三頁。
- (7) 伊藤隼三「狐憑病ニ就テ」『東京医事新誌』八二五号、一〇一～一〇三頁、一八九四。
- (8) 荒木蒼太郎「徳島県下ノ犬神憑及ヒ狸憑ニ就キテ」『中外医事新報』四八五号、七二五～七三三頁、四八六号、八〇七～八二二頁、一九〇〇(前掲(3)、七二～八七頁に再録)。
- (9) 小野寺義郷「精神病患者実験記事(第三例)」『東京医学会雑誌』四卷(七号)、三八四～三九〇頁、(二九号)、一一五九～一一六一頁、一八九〇。
- (10) 田邊耕民「精神病患者実験記事(第四例)」『東京医学会雑誌』四卷(九号)、五三二～五三六頁、一八九〇。
- (11) 田邊耕民「精神病患者実験記事(第六例)」『東京医学会雑誌』四卷(二〇号)、六三三～六四一頁、一八九〇。

- (12) 田邊耕民「精神病患者実験記事(第七例)」『東京医学会雑誌』四卷(二二号)、六九二〜六九九頁、一八九〇。
- (13) 田邊耕民「精神病患者実験記事(第八例)」『東京医学会雑誌』四卷(二三号)、七六一〜七六三頁、一八九〇。
- (14) 田邊耕民「精神病患者実験記事(第十一例)」『東京医学会雑誌』四卷(二〇号)、一二一五〜一二二〇頁、一八九〇。
- (15) 小野寺義郷「精神病患者実験記事(第十六例)」『東京医学会雑誌』五卷(九号)、五五二〜五五七頁、一八九一。
- (16) 小野寺義郷「精神病患者実験記事(第十七例)」『東京医学会雑誌』五卷(二二号)、一二三三〜一二三七頁、一八九一。
- (17) 小野寺義郷「精神病患者実験記事(第二十八例)」『東京医学会雑誌』七卷(二号)、三七〜四〇頁、一八九三。
- (18) 井村忠介「精神病患者実験記事(第三十八例)」『東京医学会雑誌』八卷(二〇号)、九一〇〜九一一頁、一八九四。
- (19) 井村忠介「精神病患者実験記事(第三十九例)」『東京医学会雑誌』八卷(二三号)、一〇二〇〜一〇二三頁、一八九四。
- (20) 若杉喜三郎「所謂「狐附キ」患者ノ実験」『医事新聞』三五八号、三〜七頁、一八九一。
- (21) 榊俣「狐憑病に就テ」『哲学雑誌』八卷(七八号)、一二五九〜一二六八頁、(七九号)、一三四五〜一三五二頁、一八九三
(榊俣先生顕彰記念誌——東京大学医学部精神医学教室開講百年に因んで——)六一〜七九頁、榊俣先生顕彰会、東京、一九八七、に再録。
- (22) 荒木蒼太郎「附憑狂ニ就キテ」『中外医事新報』四九三号、一二九七〜一三〇二頁、一九〇〇(前掲(3)、八七〜九一頁、に再録)。
- (23) 門脇貞枝「狐憑病新論」、博文館、東京、一九〇二。
- (24) 石塚尊俊「日本の憑きもの 俗信は今も生きている」二〇〜八九頁、未來社、東京、一九五九。
- (25) 石塚尊俊作製「憑きもの呼称による分布」谷川健一編『憑きもの』(日本民俗文化資料集成七)口絵、三一書房、東京、一九九〇。
- (26) 前掲(3) 一三頁。
- (27) 前掲(3) 一六〜一九頁。
- (28) 吉田禎吾・板橋作美「憑きものと社会構造——群馬県Y部落における——」谷川健一編『憑きもの』(日本民俗文化資料集 成・七) 一四九〜一五八頁、三一書房、東京、一九九〇(原論文一九七五)。
- (29) 森田正馬「土佐ニ於ケル犬神ニ就テ」『神経学雑誌』三卷(二三号)、一二九〜一三〇頁、一九〇四。

- (30) 森田正馬「迷信と精神病 附余の所謂祈禱性精神病に就て」『人性』一一卷(七号)、一二二九～二三五頁、(八号)、二七〇～二七九頁、(一〇号)、三四九～三五四頁、(一一号)、三八九～三九九頁、一九一五。
- (31) 新福尚武・宮下直之「山陰地方の狐つきについて」『米子医学雑誌』九卷(二号)、二二二～二二二頁、一九五八。
- (32) 新福尚武「山陰地方の狐つきについて」『精神医学』一卷(二号)、八三～九〇、一九五九。
- (33) 須田圭三「憑き物俗信 飛驒の牛蒡種」、須田病院、岐阜県、一九六九(谷川健一編『憑きもの(日本民俗文化資料集、七)』三一五～四一九頁、三一書房、東京、一九九〇、に再録)。
- (34) 加藤秀明・須田圭三「岐阜県飛驒地方における憑きもの俗信牛蒡種(ゴンボダネ)」『臨床精神医学』二二卷(七号)、一〇〇三～一〇一〇頁、一九九三。
- (35) 加藤秀明・白河裕志「憑きもの俗信牛蒡種憑依の一症例」『精神医学』三八卷(一号)一〇〇～一〇二頁、一九九六。
- (36) 稲田浩「祈禱性精神病についての精神病理学的一考察 エジナ憑き、狐憑き、およびその症状変遷について」『岩手医学雑誌』二四卷(五号)、五一七～五三一頁、一九七二。
- (37) 後藤忠夫「群馬の憑きもの オサキ伝承を中心にして」、後藤忠夫、前橋市、一九八六(谷川健一編『憑きもの(日本民俗文化資料集、七)』二七～一四八頁、三一書房、東京、一九九〇、に再録)。
- (38) 松岡浩司・石元康仁・兼田康宏・山口浩資・大蔵雅夫・生田琢巳「犬神憑きの一症例」(会)『精神神経学雑誌』九七卷(四号)、二七六～二七七頁、一九九五。
- (39) 佐喜眞興英「古琉球の憑物と巫祝」『民族と歴史』八卷一号、三三三～三三六頁、一九三三。
- (40) 竹川文一「出雲山間部に於ける生霊憑きの話——私の家の告白——」『出雲民俗』八号、二〇～二二頁、一九四九。
- (41) 吉田禎吾「呪術 その現代に生きる機能」(講談社現代新書)四〇〇四四頁、講談社、東京、一九七〇。
- (42) 小松和彦「憑霊信仰論」一一二～一一五頁、伝統と現代社、東京、一九八二。
- (43) 前掲(24)一四六～一五四頁。
- (44) 吉田禎吾『魔性の文化誌』一五〇～一五一頁、研究社出版株式会社、東京、一九七六。
- (45) 前掲(27)。
- (46) 広川勝美編『憑きもの タタリガミと呪い』(民間伝承集成 語り部の記録・一五)一六二～一六四、一七二～一七七頁、

創世紀、東京、一九八二。

- (47) 香川雅信「登校拒否と憑きもの信仰——現代に生きる「犬神憑き」——」『民俗宗教』五号、四五～六九頁、一九九五。
- (48) 安田宗生「トカラ、悪石島のネーシに関する覚書」谷川健一編『巫女の世界』（日本民俗文化資料集成・六）三六九～三八二頁、三一書房、東京、一九八九（原論文発表一九七二）。
- (49) 昼田源四郎「狐憑きの心性史」山田慶兒・栗山茂久編『歴史の中の病と医学』九三～一一五頁、思文閣出版、京都、一九九七。
- (50) 吉田禎吾『日本の憑きもの 社会人類学的考察』（中公新書 一二三～一二九頁、中央公論社、東京、一九七二）。
- (51) 浜林正夫『魔女の社会史』四〇頁、未来社、東京、一九七八。
- (52) キース・トマス、荒木正純訳『宗教と魔術の衰退』（叢書・ウニベルシタス）七八三～八三七頁、法政大学出版局、東京、一九九三（原本一九七一）。
- (53) 林董『後は昔の記他 林董回顧録』（東洋文庫）一〇八～一〇九頁、平凡社、東京、一九七〇（原本一九一〇）。
- (54) 前掲（21）。
- (55) 「本会記事」『東京医学会雑誌』七卷（二二号）、一八〇五～一八〇六頁、一八九三。

（精神科医療史研究会・東京）

The Phenomenology of Possession Symptoms : an Analysis of Their Structure

by Yasuo OKADA

In Japan even in the early years of the 20th century, almost all possession symptoms were animal possessions. In some areas, possessing animals or spirits were believed to be inherited in certain families (*mochisuji* families). Such areas (*mochisuji* areas) were located mainly in western parts of Japan. The author has gathered from the medical literature of the years 1879—1902, 48 cases of possession symptoms in *mochisuji* and dense areas (A areas) and 45 cases in non-*mochisuji* and thin areas (B areas), and compared both areas statistically.

In A areas, among patients of possession symptoms, many were female, of tender years or infirm. In B areas, all patients showed psychotic symptoms together with possession symptoms. In A areas, cases of acute possession reaction were prominent. In typical cases, patients suffered from mild malaise and behaved in certain strange manners. They declared spontaneously, upon being asked by others or being threatened, that they came from certain families (*mochisuji* families) bearing a certain grudge against this family. Of course, the grudge was not that of possessing animals, but that of *mochisuji* families. Thus, in possession reactions there were expressions of conflicts in neighbourhood relations. Usually the reactions were not prolonged. In several cases of *inugami* (god of dog) possession, patients straightly

declared, “I am a member of a certain (*mochisuji*) family.” These cases remind us of *ikiryō* (the live spirit of a person) possession, and reflect the historical transition from *ikiryō* possessions to animal possessions.